

# 玉手山8号墳墳丘測量調査概報

1987年3月

柏原市教育委員会

## はしがき

柏原市内には、松岳山古墳群と並んで古墳時代前期の古墳群として著名な玉手山古墳群があります。両古墳群ともに宅地開発が激しく、これまでに多数の古墳が消滅してしまいましたが、茶臼塚古墳や松岳山古墳の発掘調査によって、松岳山古墳群の実態は次第に明らかになりつつあります。

一方、玉手山古墳群は近年では玉手山9号墳の発掘調査が行なわれたのみであり、まだまだ不明な点が残されています。また、消滅した古墳が多いため、今後もあまり多くを期待できる状況ではありません。

その中で、玉手山8号墳は未調査であり、ある程度原形を留めていると考えられていました。ところが、1982年の集中豪雨によって、西側斜面下で大規模な地壊りが生じ、その影響によって墳丘の一部も徐々に崩れ始めました。そのため、柏原市教育委員会では、状況の監視を続ける一方、1986年度の国庫補助事業として発掘調査に着手する計画を立てました。

その後、1986年5月に至って、今度は東側斜面下で地壊りが発生しました。その付近には民家も多く、斜面上に位置する玉手山8号墳を発掘することによって、2次的災害が発生する可能性が考えられたため、発掘を断念せざるを得ませんでした。そして急遽、墳丘測量調査に変更し、現状の正確な墳丘測量図を作製することにしました。この墳丘測量図を、今後の古墳保護のために、大いに役立てていきたいと考えています。

昭和62年3月

柏原市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、昭和61年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が実施した、柏原市円明町所在の玉手山8号墳周辺の地形測量調査の概要報告書である。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史を担当者とし、昭和61年12月1日に着手し、昭和62年1月14日に終了した。
3. 本書の編集・執筆・製図・写真は全て安村が担当した。
4. 調査に際し、土地所有者である柏原市水道局、大阪府中小企業団地開発協会の協力を得た。記して感謝したい。
5. 本書で使用した方位は磁北である。なお、真北は磁北より約6°東に偏している。標高は、玉手山8号墳後円部頂の東山三角点（T.P.102.94m）を使用した。
6. 調査・整理の参加者は、下記の通りである。

石田 博	竹下 賢	北野 重	桑野一幸	石田成年	寺川 欽
西村 威	松下 修	秋田大介	伊藤芳匡	稻岡利彦	今中太郎

## 目　　次

第1章　測量調査に至るまで	1
第2章　玉手山古墳群の現状	4
第3章　測量調査の概要	7
第4章　総括	15

## 第1章 測量調査に至るまで

玉手山8号墳は、古墳時代前期の前方後円墳である。過去には、玉手山8号墳北東部での宅地造成に伴う調査で、前方部北東に位置する横穴式石室を内部主体とする円墳と丘陵に直交する幅約2mのV字溝が検出されている。V字溝は前方部前面を画する溝の可能性も考えられるが、時期が確定できないいうえ、円墳よりも更に北側で検出されており、現況から推定される墳丘よりもかなり長大になること、前期古墳の墳丘を深いV字溝で歛する類例が見られないことから、玉手山8号墳に伴う遺構とは考え難いように思われる。墳丘部分に対しては未調査であるが、十数年前の円明第二配水池の建設、および配水池へ至る道路建設の際に、後円部が一部削平されている可能性が考えられる。

その玉手山8号墳で、地面にわずかな亀裂を発見したのは、1982年10月の玉手山9号墳発掘調査中であった。玉手山8号墳の現状確認中に、墳丘のくびれ部付近に数cm幅でかなり深い亀裂が見出された。同年8月の集中豪雨によって、西側斜面下の道路付近で地にりが生じ、防災復旧工事が完了したばかりであり、亀裂はこの地にりの影響によるものと考えられた。その後も、現状確認を続けたが、亀裂は大きくなる一方であり、大規模な地にりが発生する危険性が考えられた。そのため、柏原市教育委員会から大阪府中小企業団地開発協会にその旨を連絡し、防災工事の必要性と共に、玉手山8号墳の保存に対しても留意して欲しいと要望した。その結果、応急処置として亀裂が生じている付近全面をビニールシートで覆い、立入禁止にすることになった。

しかし、その後も亀裂は大きく、深くなるばかりであり、徐々に斜面全体がにり始めていた。1箇所のみであった亀裂も数箇所で認められるようになり、大規模な地にりの危険性が高まった。そのため、本格的な防災工事を実施することになった。防災工事は地にりを生じている下半の土砂を取り除き、整地し、コンクリート擁壁で保護するというものであり、その工事の残土を玉手山8号墳へ戻し、古墳の現状保護を計るというものであった。

当時、前方部で数十cmの落差が生じ、前方部の保存は不可能な状況であった。また、その崩壊が後円部にも影響を及ぼしそうな状況であった。前方部が徐々ににり、その断面が徐々に拡大していく過程を観察した結果、前方部の大部分が地山整形で築かれているようであること、時期不明の土坑状の遺構を確認したが、埋葬施設とは考え難く、前方部に埋葬施設は無かったと推定されること、現状では葺石が残っていないこと等が確認された。

1983年4月から、柏原市教育委員会の立会いのもとに防災工事が実施された。その際に、崩土の中から埴輪片が採集され、玉手山8号墳が前期古墳であることが初めて考古学的に裏付けられた。工事は無事終了したが、残土が出なかったため、玉手山8号墳を残土で保護すること

が不可能となった。これは、緊急の工事であったため、やむを得なかったと考えている。

この防災工事によって、大規模な地にりが発生する可能性は無くなつた。しかし、現状のまま残された玉手山8号墳周辺では、わずかではあるが地にりが続き、墳丘も徐々に浸食され始めた。前方部は完全に崩壊し、前円部も次第に崩壊し始め、後円部の崩壊面は比高差3mにも達する崖面を呈する状況にあった。後円部崩壊土からは埴輪片が採集され、崖面の観察から、後円部は地山整形の後、20cm前後の盛土を施し、河原石による葺石が葺かれていることが判明した。そして、現状のままで更に崩壊が続くことが予想され、保存策を講じる必要性からも発掘調査を実施することが必要と思われた。そのため、柏原市教育委員会では大阪府教育委員会、中小企業団地開発協議会との協議によって、1983年以来、毎年のように発掘調査の計画を立案してきたが、調査期間、費用等の問題、また調査後の措置について調整が計れないままであった。

しかし、このまま放置できる問題ではなく、1986年度国庫補助事業・重要遺跡範囲確認調査として、総額1,500,000円（国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）の補助金が認可され、発掘調査に着手することになった。ところが、1986年5月に至って、今度は玉手山8号墳東側斜面下の旭ヶ丘地区で亀裂が発生した。西側と異なり、東側には住宅が多く、地にりが発生すると大規模な灾害が予想されたため、早急に応急工事が行なわれると共に、警察、消防と同様に、柏原市職員も全員で24時間の監視体制をとることになった。一部住民の避難も実施された。その後、地にりは沈静化したが、そのような状況のもとで玉手山8号墳を発掘調査することが困難になった。防災のため、円明第二配水池周辺はビニールシートで完全に覆われ、ポンプによる地下水の汲み上げが行なわれている。玉手山8号墳の発掘調査が、この地にりに影響を与えるとは考え難いが、全く影響がないと断言できない状況にあり、住民のためにも発掘調査を中止するべきであると判断した。そして予算を減額し、墳丘測量調査に変更することにした。現状の詳細な地形図を作製することによって、将来の資料とするためである。

このような複雑な経緯の後、玉手山8号墳、およびその周辺の地形測量調査を実施することになった。調査は、1986年12月1日に着手し、1987年1月14日に終了した。

現在、玉手山8号墳の崩壊は、小康状態にある。しかし、無残な崖面が各所に見られ、亀裂も数箇所で観察される。また、測量によって判明したことであるが、地にりの状態が複雑であり、今後、再び地にりが生じる可能性も残されている。発掘調査の着手が遅れ、調査の機会を逸してしまったことは残念であり、行政の怠慢のためであると批判されてもやむを得ない。今後は、前方部の大半と後円部の一部を失なった玉手山8号墳を如何に保存していくかという重要な課題に取り組んでいかねばならない。宅地化が進み、数多くの古墳が破壊されていった玉手山古墳群の中で、墳丘東半が削平されて残っている玉手山9号墳と共に、玉手山8号墳の保存について、努力していきたいと考えている。

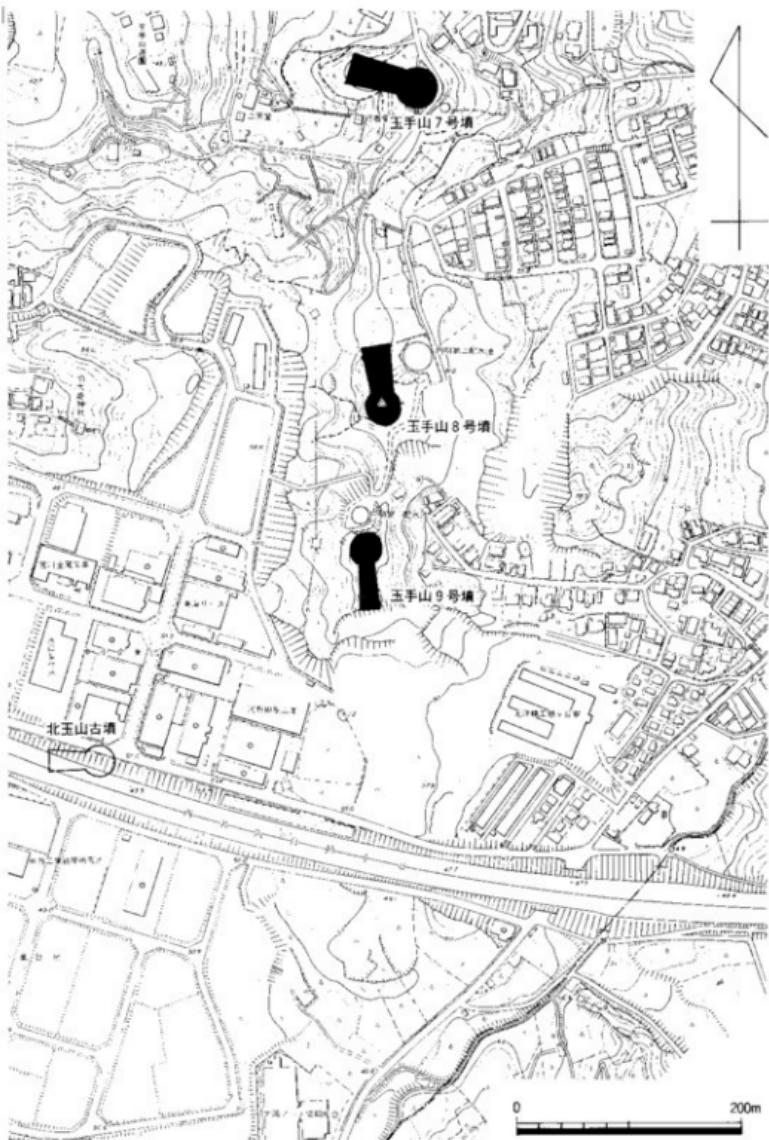


図-1 調査地位置図

## 第2章 玉手山古墳群の現状

玉手山古墳群は、石川の右岸に南北にのびる玉手山丘陵上に点在する古墳時代前期の古墳群である。広義には、駒ヶ谷周辺の古墳まで含むことがあるが、ここでは北玉山古墳以北の古墳群として扱う。古墳群は、前方後円墳10基以上と円墳数基から構成されていたようであるが、詳細は不明である。時期は古墳時代前期後半から中期初頭を中心とし、一部中期から後期にかけての古墳も存在する。また、前期の古墳と如何なる関係を有するかは今後の課題として、横穴式石室を主体とする後期古墳、凝灰岩層に掘り込まれた横穴數十基から構成される安福寺横穴群、玉手山東横穴群がみられる。集落遺跡としては、丘陵から旧石器が採集されており、弥生時代の高地性集落、7世紀から中世にかけての集落が確認されている。片山廃寺、五十村廃寺などの古代寺院跡の遺構も確認されており、南北朝の争乱や大阪夏の陣の舞台ともなった土地である。

さて、玉手山古墳群は前方後円墳と考えられる古墳10基を北から順に、1号墳から10号墳と呼称している。他の名称もあるが、10号墳の北玉山古墳を除くと、現在ではこの名称が定着している。各古墳は未調査のものもあり、また調査済みでも報告されていないものが多く、不明な点が多い。これまでの知見に基づく概略は過去に報告しており、その後新たな資料もないため、重複を避け、ここでは玉手山古墳群の現状と今後の展望について若干書き留めておきたい。  
各古墳の内容については、既報告を参照願いたい。<sup>(1)</sup>

玉手山4～6号墳は、発掘調査の後、宅地開発のために破壊されてしまった。また、北玉山古墳も発掘調査の後、西名阪自動車道建設のために破壊された。そのため、現在残されている主な古墳は、玉手山丘陵北端に位置する玉手山1～3号墳と、丘陵の中央から南にかけての丘陵最高所付近に位置する玉手山7～9号墳である。

玉手山1号墳は、ほぼ市有地となっているが、後円部頂に墓地が残されている。立地の良さから周辺の宅地化が激しく、1号墳のみが草叢となって残っている。柏原市では、毎年、草刈りを行なっているものの、住民からの苦情もあり、現状で放置しておくことはできないと考えている。幸い、古墳の大半が市有地であるため、史跡公園として整備する構想はあるのだが、費用等の問題で思うようにいかない。とりあえず、整備のための資料として、墳丘の部分調査を計画しており、早ければ1987年にも着手する予定である。残されている古墳が、市民の憩いの場として生まれ変わることを期待している。

玉手山2号墳は、墳丘全体が墓地になっている。古墳が後世に墓地として利用されている例は数多い。このような場合、宅地化等の開発から守られる反面、墓地造成のため徐々に墳丘が改變される弊害もある。また、発掘調査を行なうことは、不可能と思われる。現在では、推定

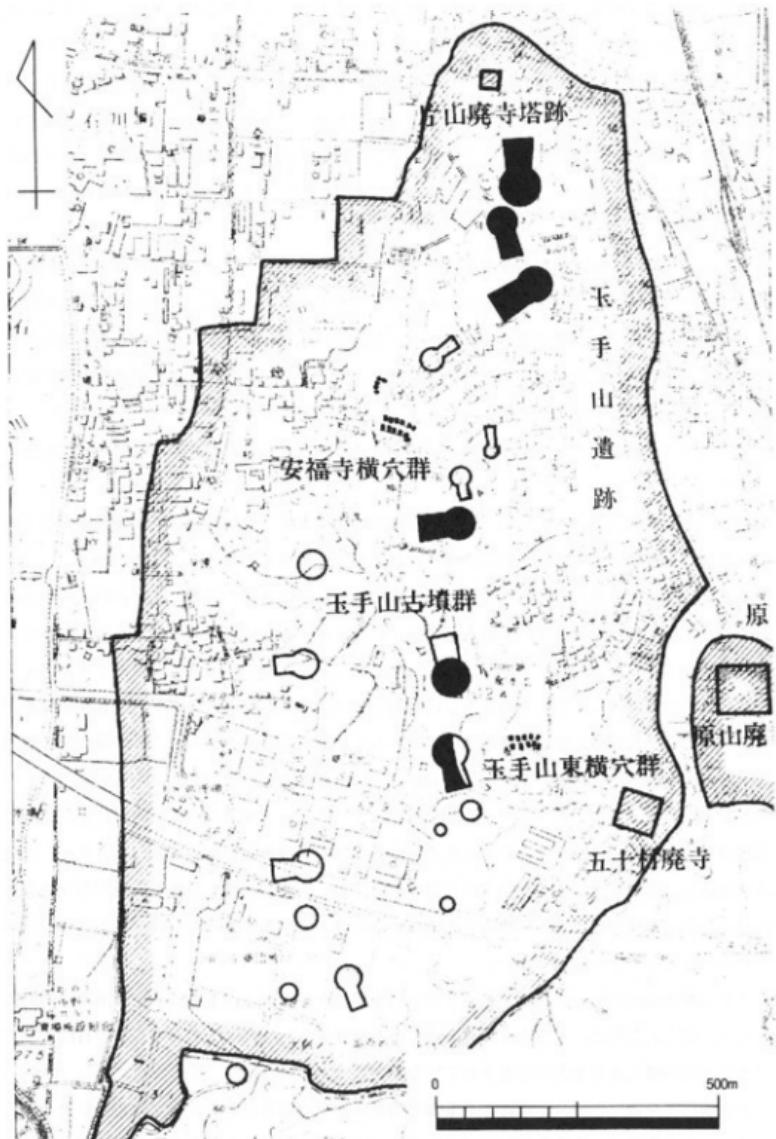


図-2 周辺の遺跡分布図

の墳體付近にコンクリートの壁がめぐり、前方後方墳のような外形になっている。やや高い所から見ることによって、初めて古墳と認識できる状況である。

玉手山3号墳は、柏原市立老人センターの裏山にあたる。後円部頂へ上ってみると、かなり広い平坦面があり、相当の削平を受けているようである。また前方部の大半は私有地である。3号墳は、老人センターの裏山という立地から、妙に手を加えず、現状のまま残しておくのが良いように思われる。なお、老人センター前の駐車場から、玉手山1・2号墳の墳丘がよく見学できる。

玉手山7号墳は、後円部が玉手山遊園地の展望台となっており、前方部は安福寺境内に含まれる。後円部は、玉手山遊園地の国分側入口に入ったすぐ右手にある。後円部には、大坂夏の陣の戦没將士供養室印塔が建てられている。全体に地膚がむき出しになっており、地山の見られる部分もある。そのため、残存状態は良いとは言えない。前方部には、尾張徳川家の廄所があり、地形の改変も見られるが、樹木が生い茂った状況である。

玉手山8号墳は、前述のように、地図によって前方部の大半が崩れ、後円部の一部も崩れている。

玉手山9号墳は、墳丘の東側約3分の1が過去の造成によって削平されて崖面が露出している。西側は、調査後に埋戻しており、現在は草木が生い茂っている。

玉手山古墳群は、過去に史跡指定の動きもあったが、破壊された古墳が多く、残された古墳もかなり変形しており、保存は楽観を許さない状況にある。特に、玉手山8・9号墳は、地質上の問題がある点と、開発業者が再三にわたって開発計画を立てている点が気がかりである。

これらの古墳以外に、安福寺の境内には香川県鷲ノ山産の凝灰岩で作られた割竹形石棺蓋が置かれている。割竹形石棺は、畿内では類例の少ないものであり、しかも、蓋の周縁には線刻による直弧文がめぐらされている。この石棺は、伝承によると玉手山3号墳から出土したものであるらしいが、定かでない。雨ざらしで置かれているため、覆屋が必要と思われる。また、安福寺参道の両側には、横穴群が見られる。騎馬人物像の線刻画を有する横穴もあり、この横穴は施錠し、保護している。安福寺の北西でのマンション建設に伴う調査でも横穴が5基発見され、それらの横穴の周辺を柏原市に寄贈して頂いた。柏原市としては、責任をもって、管理と整備にあたらなければならない。

玉手山遊園地内には、竪穴式石室と家形石棺が移設されている。玉手山7号墳後円部南側にあたり、竪穴式石室は、玉手山6号墳の東石室を移設したもののようにあり、家形石棺は、東ワカ山古墳の横穴式石室内に安置されていたものようである。

その他に、片山庵寺塔跡の位置する薬師堂前庭に、巨大な塔心礎を含む礎石5個が置かれたり、これらを含め、古墳を整備することによって、玉手山丘陵の歴史を知り、考える場として有効に生かすことが柏原市にとって必要と思われる。

## 第3章 測量調査の概要

### 1. 測量方法

測量は、1986年12月1日に着手した。まず、玉手山8号墳後円部頂の東山三角点を基準に、磁北に合わせ、開放トラバースによってポイントを設定していった。ポイントは、測量範囲全体で40箇所である。各ポイントを基準に、レベルを併用した平板測量によって測量を実施した。縮尺は100分の1、等高線の間隔は25cmとした。レベル基準高はT.P. 102.94mの東山三角点を基準にした。

西側斜面には雑木が多く、見通しが悪いうえに、地にりによって複雑な地形を呈しているため、測量はかなり困難であった。また、東側斜面には防水のために、一面にビニールシートが張られており、ビニールシートをはがさずに測量を行なった。そのため、いずれも若干の誤差を含んでいることを断わっておきたい。

なお、測量に先立って、現状の航空写真撮影を実施した。

### 2. 測量成果

測量の結果、玉手山8号墳は、ほぼ南北を主軸とする北向きの前方後円墳と考えられる。予想通り、前方部の大半と後円部の一部が既に崩壊しているようであり、後円部東側も等高線が弧状をなさず、かなりの削平が考えられる。また、測量によって、複雑な地にりの状況を把握することができたが、これについては後述する。

さて、最も問題となる墳丘の規模であるが、測量図を見る限り、やはり三角点付近が後円部の中心となるようである。後円部の基底部は、明瞭ではない。しかし、後円部から南東方向へのびる小尾根が円明第二配水池への道路で切られており、地山が露出している。地形から、この小尾根を後円部の一部と考えることはできず、道路によって切断されている付近に後円部の基底部を求めるのが妥当と思われる。そのように後円部を復元すると、後円部の直径は約40mとなる。基底部の標高は99m前後であろう。仮に基底部の標高を99mとすると、後円部東側で5.7mの削平が考えられ、西側で最大6.7mの封土流失が考えられる。後円部の直径が40m以上になることはないと考えられるが、もう少し小さくなる可能性は十分に考えられる。

また、標高100～100.5m付近の等高線の間隔が広くなっていることから、この付近に段が存在するのかもしれない。

前方部の北東には、横穴式石室を主体とする古墳が存在する。円墳と考えられるものである。この古墳は、宅地造成に伴って確認され、造成地の南西隅に位置することが幸いし、現在はネットフェンスで囲まれて保存されている。横穴式石室は、現状ではわずかに開口しているのみであり、内部の状況は不明である。この古墳の南西部に、島状の高まりが見られる。この島状

の高まりは、前方部先端近くの高まりの一部ではないかと考えられる。このように考えると、先の古墳とこの島状の高まりの間に前方部端が位置するのではないかと思われる。古墳の時期は6世紀後半と推定され、玉手山8号墳との間に約200年の時期差があるが、200年程度ならば、玉手山8号墳はほぼその原形を留めていたと考えられる。その古墳の一部を削平して新たに古墳を築造したとは考え難いのである。付近には横穴式石室を主体とする古墳は見られず、この古墳は群集墳中の1基ではなく、単独墳と考えられる。その古墳が敢えてこの場所に築造されていることを考えると、玉手山9号墳に接して築造することに意義があったのではないかと想像される。以上のように考えると、この古墳が結果的に玉手山8号墳の前方部の一部を削平していることがあっても、大きく削平していることはないと思われる。このような理由から、古墳と島状の高まりの間に前方部端があると考えるのである。

後円部と前方部の基底部を以上のように復元すると、墳丘の全長は約80mとなる。前方部の幅は全く不明であるが、25m前後と復元すると、墳形のバランスが良いようと思われる。後円部の高さは約4m、前方部基底部の標高は後円部より低く、95m前後になるのではないかと思われる。後円部と前方部の基底部がどのようにつながるかは不明である。後円部と前方部の比高差は、現状で5.5mである。

### 3. 地にりの状況

玉手山8号墳の主軸から32~53m西側に、総延長70mに達するコンクリート擁壁が築かれている。これが1983年の防災工事によって設置されたもので、コンクリート擁壁の高さは3.1mである。コンクリート擁壁の上面は、整地によってほぼ平坦面となっているが、その東側には、最大の地にりによる崖面が露呈しており、垂直に近い部分もある。最大比高差は13.8mに達する。この地にりは、円弧にりと呼ばれるものであり、断面から見ると斜面全体が弧を描くようになっているものである。つまり、斜面の中腹で最も大量の土砂がにることになる。そのため、表層だけの地にりと異なり、一度にり始める大規模な地にりとなる。また、一部の土砂を移動させたり防護しても、完全に地にりを止めることは困難である。8号墳東側の旭ヶ丘地区の地にりも同様なものである。

玉手山丘陵の基盤は大阪層群である。この大阪層群が隆起、浸食等の作用を受けているうえ、8号墳の東側には玉手山東横穴群にみられるように二上山系の凝灰岩層の堆積がみられるなど、複雑な地層を呈していると考えられる。更に、その丘陵の裾部で大規模な造成によって斜面の削平が行なわれたため、地層の境目などで地にりが生じるようである。

また、今回の測量によって判明したことであるが、玉手山8号墳の西斜面では、1982年の地にり以前にも、何度か地にりがあったようである。一箇所は、前方部の北西部分であり、北西方向の玉手山遊園地側へにっている。地にりの頂部では、1m前後の段差が見られ、その西側は平坦面となり、また急斜面となる。1982年の地にりは、この地にりと重複するのを避けるか

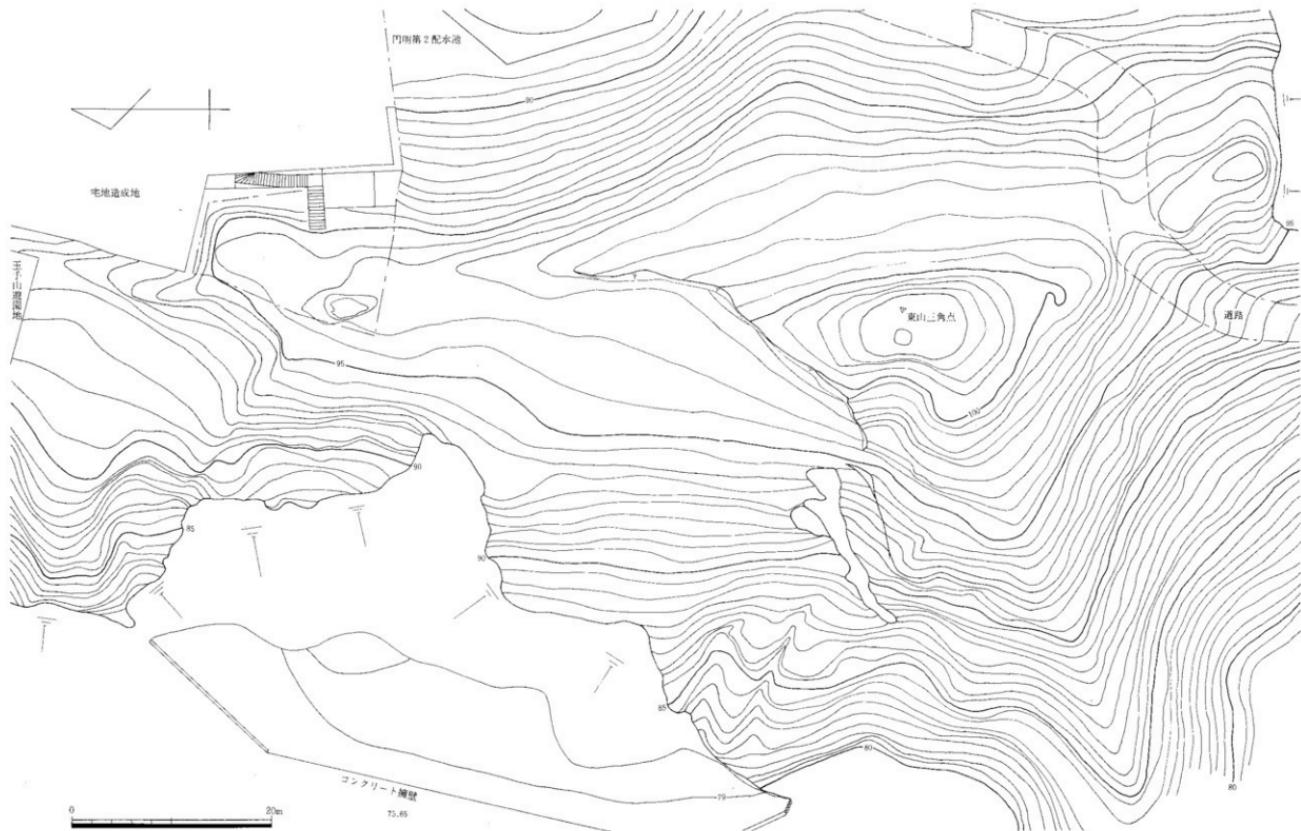


図-3 周辺地形図

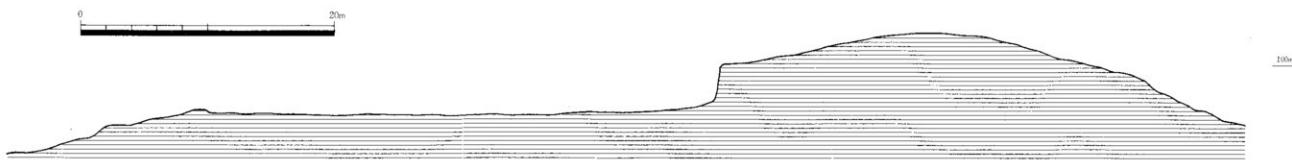
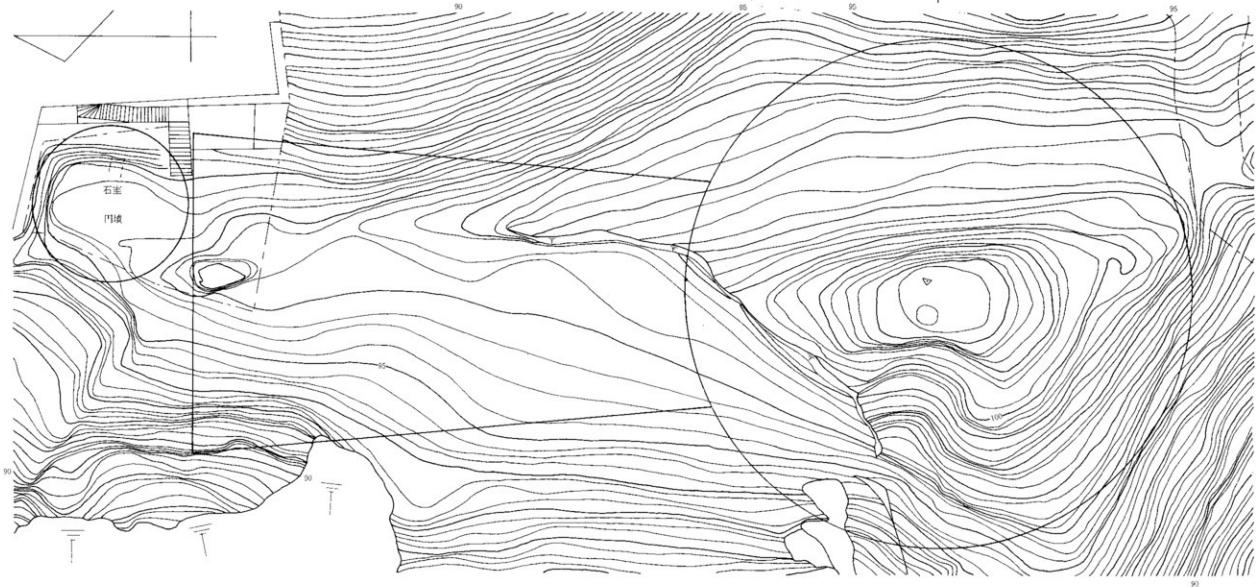


図-4 填丘測量図

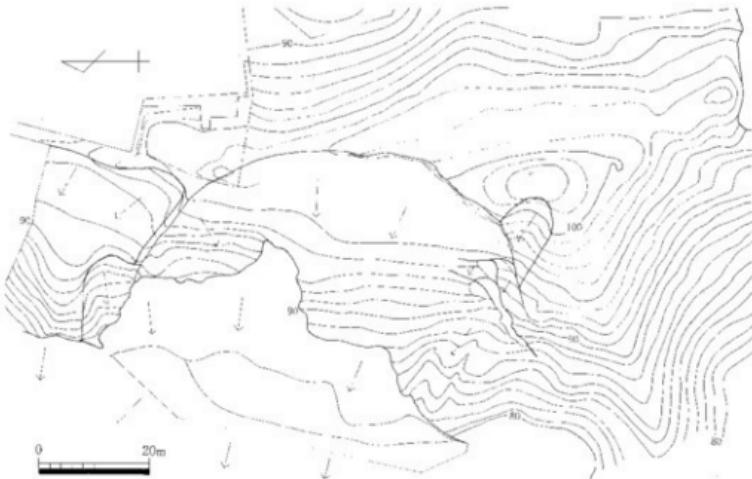


図-5 地にり状況図

のようにになっており、この2箇所の地にりの間は、幅1.5m前後の尾根状となって北西へのびている。

この2箇所の地にりの境界西側で西南西方向への地にりが観察される。この地にりは、上記の地にりの間に発生したものと思われる。更に西側に、現在崖面となっている地にりの痕跡が観察されるが、これは、1982年の地にりに伴うものであろう。

1982年の地にりは、後円部西側付近で複雑な状況を呈する。現在も3箇所で地割れが見られ、数回の営力が働いたものと思える。また、この付近では地層の堆積状況と異なった複雑なにりかたをしているのではないかと思われる。

後円部の西側では、境頂から北西方向への小規模な地にりが観察される。この地にりは1982年の地にりによって切られており、更に古い地にりであることがわかる。また、その規模から考えると、後円部封土の盛土のみがこった可能性も考えられる。

明瞭に観察される地にりは、この4箇所であるが、その他にも、過去に地にりが生じている可能性が考えられる部分がある。例えば、後円部西側の斜面下方や、南側斜面である。このように、過去数回にわたる地にりによって、玉手山8号墳はかなり改変されており、その後の人为的改変も考慮すると、残存状態はそれほど良好な状態とは言えない状態であった。そこへ、1982年の地にりが決定的な打撃を与えてしまったようであり、墳丘測量図からも判断されるように、墳丘のほぼ半分が崩れてしまったわけである。

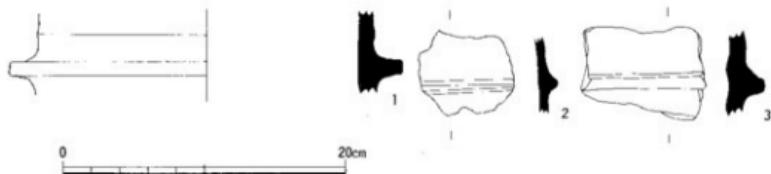


図-6 表採埴輪

#### 4. 表採埴輪

1983年以来、埴輪片を表面採集しているが、その数量は10点に満たない。未発掘であるため、埴輪の資料が少ないので当然であるが、それを考慮しても、玉手山8号墳に樹立された埴輪は、少なかったのではないだろうか。今回の測量中にも、2点を探集したのみである。また、土器片は、これまでに全く採集されていない。

1は、1984年7月11日に後円部崖面の崩壊土中から採集された円筒埴輪片であり、後円部に樹立されていた可能性が強い。凸帯部分での直径は、かろうじて27.8cmと復元される。凸帯は高く、断面は横長の長方形状となる。凸帯の高さは1.8cmである。色調は淡黄褐色で、石英・長石粒を含む。全体に風化が激しく、外面は凸帯部分がヨコナデ、他はナデ調整であるが、内面の調整が不明である。

2・3は、今回の測量中に表採したものである。2は、後円部南斜面で表採した円筒埴輪片である。直径を復元することは不可能であるが、凸帯断面が三角形状を呈し、円筒埴輪(1)と全く異なる。器壁も(1)が10~11mmと厚いのに対し、(2)は5~7mm程度である。色調も淡赤褐色を呈し、石英・長石だけでなく、チャート等の砂粒を多く含んでいる点で異なる。

3は、後円部西方の斜面で表採した埴輪である。断面は、円筒埴輪(1)と同様の形態であるが、埴輪が円弧状の平面を成さず、直線状に続くようである。おそらく、形象埴輪と考えられその形態から、家形埴輪の一部である可能性が考えられる。色調、焼成・胎土等は(1)と酷似する。

以上のように、玉手山8号墳の埴輪資料は少量であるが、形態、胎土等から、最低2種類に分類できる見通しがたてられる。1・3の埴輪は、実見する限り、玉手山1号墳の埴輪に似ているように思われる。また、2の埴輪は、玉手山3・9号墳の埴輪、とりわけ9号墳の埴輪に似ているように思われる。2の埴輪が9号墳の埴輪の混入でない限り、玉手山8号墳の埴輪の位置付けが非常に興味深いものとなる。

## 第4章 総括

今回の墳丘測量調査を総括するにあたって、まず、玉手山8号墳の考古学的検討を加えておきたい。しかしながら、考古資料としては、わずかな埴輪片のみであり、現状で考えられる範囲で考えてみたいと思う。

初めに、玉手山8号墳の年代であるが、測量調査によっても墳形は明らかにならず、墳形から年代を推測することは困難である。しかし、後円部と前方部の比高差が5.5mもあり、前期古墳に含まれることは間違いないと考えられる。また、断面観察から、前方部の大部分が地山整形によって築かれていることもこれを首肯させるものである。

このような状況のもとで、更に細かい年代を検討することになると、わずかな埴輪に頼らざるを得ない。埴輪は、いずれも野焼きと考えられるものであり、前述のように、玉手山1号墳の埴輪に似ているものがある。1号墳の年代も埴輪によって決定せざるを得ず、明確にはし難いが、大きさ、調整等から古墳時代前期末頃と考えられる。<sup>(3)</sup>また、玉手山9号墳に類似した埴輪が見られることについても述べた。玉手山9号墳の埴輪には、形象埴輪が見られず、特殊器台の影響を残した円筒埴輪が見られるなど古い要素が多く、前期中葉頃まで遡るのではないかと考えている。<sup>(3)</sup>また、玉手山3号墳の埴輪が玉手山9号墳の埴輪に似ており、玉手山9号墳よりも新しいと考えられることについても、かつて検討したことがある。<sup>(5)</sup>この中に、玉手山8号墳の時期を位置付けると、玉手山3号墳を前後する時期、つまり古墳時代前期後葉頃になるのではないかと考えられる。いずれにしても、わずかな埴輪からの考察であり、今後、資料が増加すれば改めて検討を加えてみたいと思う。

次に、玉手山8号墳の主体部についてであるが、墳丘の崩壊過程の観察に基づく限り、前方部に埋葬施設が存在したとは考え難い。後円部については、未調査のため不明であるが、墳丘測量の結果から考えると、後円部墳頂が大きく削平されているとは考え難く、埋葬施設は残っていると考えられる。玉手山古墳群内の前方後円墳で、これまでに埋葬施設が確認されているものを後円部に限って見ると全て安山岩の板石積みによる竪穴式石室である。となると、玉手山8号墳も竪穴式石室の可能性が考えられるのであるが、後円部付近には、石室材と思われる板石が全く見られない点が疑問である。これは、竪穴式石室が盗掘を受けずに完全な状態で遺存している可能性を示していると共に、後円部の埋葬施設が、竪穴式石室でなく粘土槅である可能性も残しているように思える。他の古墳の墳頂部には、安山岩の板石が少なからず散在していることを考えると、むしろ後者の粘土槅を主体部としている可能性が強いように思われるるのである。この点についても、将来、発掘が実施されがあれば明らかになることであろう。

それ以外に、玉手山8号墳で確認できることは、後円部に20cm程度の盛土を施し、河原石による葺石を葺いていることである。これは、後円部崖面で観察され、以前には良好な状態で観察できたが、現在ではかろうじて確認できるのみである。葺石の石材は、玉手山9号墳と同様にチャート等の亜円礫が多く見られる。

現在確認できるのは、以上のような点である。玉手山8号墳に関しては、今後も崩壊が続く恐れがあり、予断を許さない。しかし、当面は現状観察を続けることにし、発掘調査は行なわないことにした。現状観察を続ける中で、玉手山9号墳も含め、今後どのように対応していくべきかを考えていくことにしたい。そのために、今回の墳丘測量図や航空写真を有効に活用していきたいと考えている。

#### 註

- (1) 安村俊史「位置と環境」「玉手山9号墳」柏原市教育委員会 1983
- (2) 安村俊史「玉手山古墳群と松岳山古墳群」「古市古墳群とその周辺」古市古墳群研究会編 1985
- (3) 惣ヶ丘地区の地にり監視に当たっていた際に、地にりの状況を計測しておられた技師の方に教示していた  
だいた。
- (4) 京北考古資料館「大阪府の埴輪」
- (5) 安村俊史「玉手山9号墳」柏原市教育委員会 1983
- (6) 安村俊史「玉手山3号墳採集の埴輪」「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報・1983年度」柏原市教育委員会

1984

# 図 版



南から



西から



地にり状況



後円部



後円部崩壊面



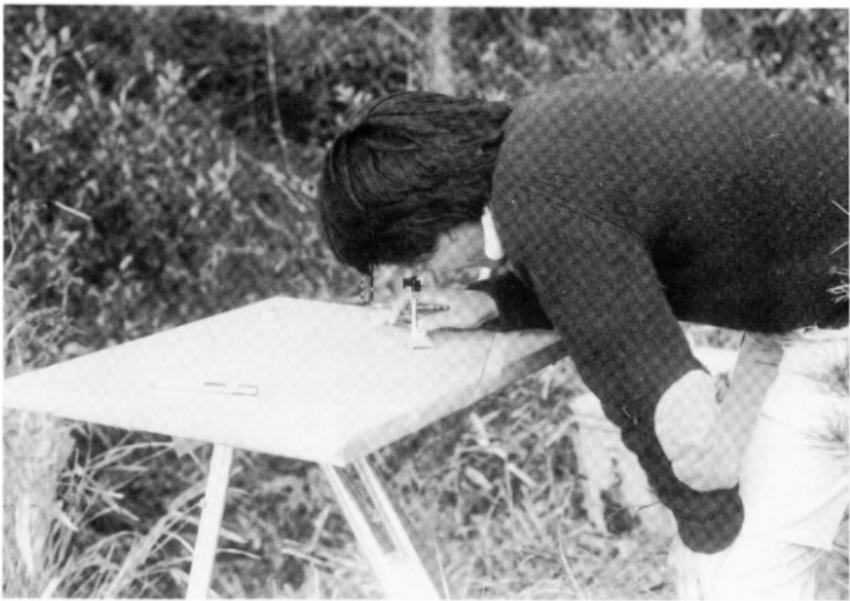
後円部葺石



地割れ状況



地にり状況



玉手山8号墳墳丘測量調査概報

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和62年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

